鉄道

ノロエステ

大城立裕

南米移民一世にとって
この歳月は何であったか。
脱魂し憑霊して故郷に向か
わんとする切々の思い！

日本人とは何かを問いかける著者渾身の南米連作

ノロエステ鉄道

著者紹介

一九二五年沖縄県生まれ。上海の東亜同文書院に学ぶも、途中終戦による学校閉鎖で帰郷。以後、米軍占領下の琉球政府通商課長や沖縄史料編集所長を勤めるかたわら創作にいそしむ。六七年『新沖縄文学』に発表した「カクテル・パーティー」で芥川賞受賞。主な作品に「亀甲墓」「ニライカナイの街」「小説・琉球処分」「神の魚」など、評論に「ばなりぬすま幻想」「沖縄の伝説」「私の沖縄教育論」「恩讐の日本」「般若心経入門」などがある。また近年、「世替りや世替りや」等、沖縄方言芝居を敢えて東京で書下し上演するなど、沖縄に根づき沖縄を考える作家として活躍中。

ノロエステ鉄道

一九八九年十一月二十日　第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者　大城立裕

発行者　豊田健次

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷　大日本印刷
製本　中島製本

© Tatsuhiro Oshiro 1989, Printed in Japan

ISBN4-16-311360-6

万一落丁乱丁のあった場合はお取替いたします

目次

ノロエステ鉄道……ブラジル 5
南米ざくら……ボリビア 39
はるかな地上絵……ペルー 89
ジュキアの霧……ブラジル 147
パドリーノに花束を……アルゼンチン 191

装釘　坂田政則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ノロエステ鉄道

初出誌――『文學界』

「ノロエステ鉄道」　一九八五年二月号
「南米ざくら」　一九八七年二月号
「はるかな地上絵」　一九八八年八月号
「ジュキアの霧」　一九八五年七月号
「パドリーノに花束を」　一九八九年七月号

ノロエステ鉄道

I

サンパウロの日本総領事館から、一千キロもわざわざお運びくださったのですか。こんなとるにたらぬ老女のために、しかもこんなむさくるしい住まいへ、光栄というか、恐縮でございます。あいにく息子も嫁も仕事に出てしまいました。カフェーのひとつもさしあげたいところですが。

はい、数日前、このカンポグランデの日本人会から連絡はいただいております。ただ、そのときも申しあげたのですけれども、やはりご辞退申しあげたく存じます。ブラジルへ日本人として最初に移民をした、それが七十年も前のこと、それいらい日本へ帰らずに一途に移民として頑張ってきた、ただそれだけのために表彰してくださるというのですが、私としてはただ痛みいるばかりです。好きで居ついたのではないのですもの。幾度か日本へ帰ってしまいたいと、いいえ、実をいえば毎日々々そればかりを考えながら、生きながらえてきた七十年間。帰らなかったのではなく、帰れなかったにすぎない。そして、日本人移民として自慢できるような生きかたをして

きたかというと、そうでもないのですもの。何の御褒美に値いしましょう。

夫が生きていましたら何と申しましたことでしょうか。褒美として日本へ帰してほしいと、あるいは申したかも知れません。あれほど恐怖に追いたてられるようにして出てきた故郷へ、いますぐにもとんで帰りたいと、矛盾した気持ちをもてあました七十年の毎日でした。それをいま、晴れて帰れるようにしてほしいと願うのは、かなわぬ夢になったとはいえ、妻としてもはかないが熱い夢には違いないのです。

移民はみんな日本へ帰りたがったのです。海外雄飛だなどと綺麗ごとではなばなしく送られてきたのでしたが、誰もがひと月もたたないうちに後悔しはじめたのでした。多くが貧しい農家の次男三男で、耕す土地もないので出てきたということでした。移民募集代理人の話ではブラジルにコーヒーという金のなる木があって、コーヒー摘みを一年もやれば大金を儲けて故郷へ錦を着て帰ることができるというのでした。日本で食いつめていた人たちが、みんなそれを真にうけて渡航費を借金して来たのです。けれども金のなる木などという夢のような話はまもなく消えうせて、契約期間の半年にもみたないうちに耕地を夜にげする者が出たのです。賃金手取り高があまりにも惨めで、そのままではいつ日本へ帰れるかわからないという不安がきざしたのでした。そのようにしてはじまった七十年の移民生活でしたし、そのうちの幾人が、頑張ったあげく移民してよかったと満足していらっしゃるのかわかりませんが、それだからこそまた、成功しても失敗しても日本政府から移民の功労者として表彰されることではあるのでしょう。

でも、私たち夫婦は違います。移民に金儲けの夢をつながなかったといっては嘘になりましょ

うが、底の事情は違うのです。食いつめるどころか、夫も私も村では上位にかぞえられる農家に生まれたのです。夫は三男ではありましたが、分けてもらった土地を耕して食えないことはなかったのです。私は女子師範学校に受験して落ちたからそのままになってしまったのですが、弟は東京の私立大学を出ました。「食いつめて移民」などということを、考えるはずもなかったのです。まったくの思いつきでした、夫が移民を決意したのは。移民募集とあれとがかちあったからです。あれのことを申しあげてよいかどうか、私はほんとうにためらいます。日本人として、いまでも恥ずかしいのです。それでもあのころは、そうは言っておれませんでした。

夫が二十歳、私が十七歳で、私たちは結婚しました。結婚したかと思うと、私の父母がまもなく表情をくもらせたのも、妙なことです。村の若者たちのうちの誰と誰とが来年は兵隊にとられる、という思いが、父母や私たちの念頭にはたえずありました。そのうちの誰彼がちかごろ目立って痩せてきた、ということも話題に出ました。そしてある日、夫のいちばん親しかった友達が山で木の枝を切ろうとして指を切りおとしてしまった、という話がある怖れの思いをこめて伝えられました。痩せてきた人は醤油を飲んだのであるし、指を切りおとしたのは誤ったのではなくてわざとそうしたのだということが、それとなく村では囁かれるようになりました。よその村でもそういうことがあるらしいと、世間では取沙汰しておりました。私の部落では日露戦争で戦死者を三人も出しました。村全体ではたぶん二十人にものぼったのではないでしょうか。戦争というものは不思議なものでした。はじめて戦争というものを私が聞いたのは、日清戦争のときでした。私が九歳、小学校の二年で、ほんとうに何も分らない年頃ですが、大人たちが大喜びしてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た様子だけはよくおぼえています。なんでも日清戦争では日本が負けると思ったのに勝ったのがうれしい、ということであったようです。日本はえらい、つよい国だと、学校の先生もよく話しました。そのあと、学校の生徒が急にふえてきました。私が入学したときなどは、新入生が五人しかいなかったのに、日清戦争のあとの入学者は二十人あまりにもなってしまいました。そのあと、しだいにふえてきたようです。もちろん、年齢はまちまちです。十四、五になって小学校に入学する者もいたのですから、今日から見るといかにも可笑しなものですね。なにしろ、日本の教育を受けておかないと取り残されるぞ、といった風潮であったようです。このころはつまり、戦争とははなやかな明るいもののように見られていたようです。それにしても、その二、三年後に徴兵制が布かれるようになってから、また世間の気分は落ちつかなくなりました。日本人としての名誉のために兵隊へ行くのだといって、勇んで行きながら、帰ってくると軍隊とは辛いものだという話をよく聞かされたのです。辛いことのなかでも、標準語がへたなのでよくいじめられた、それがいちばん辛い、という話をよく聞かされました。それでも、日露戦争がはじまると世間はいっそう意気あがったのですから、分らないものです。こんどはロシアと戦争だ、こんどこそ沖縄兵が手柄をたててやるぞと、兵隊たちは勇んで出征していきました。そして、戦死者が一人出たときに、世間の熱気はいっぺんに冷まされてしまったのです。戦争では日本人も死ぬことがあると、あたりまえのことを今更のように誰もが知らされました。

私の夫は、よい体格の持ち主でした。村の若者たちのあいだで相撲の勝負をしても、番に立つ人でした。近所の部落を二つ三つそろえても二才頭のようにいわれていた人です。その立派な身

体を醤油や鉈でみずから損うことはしたくないと、ひそかに私にもらしていました。それでも徴兵検査は翌々年に迫っていますし、その運命はどうしようもなかったのです。検査をうければ、まちがいなく甲種合格でしょう。私のほうは半ば諦めておりました。

そこへ、ブラジル移民の募集があったのです。明治四十一年四月のことです。夫が興奮したような眼つきで私を誘って、村番所へかけつけたものです。移民募集代理人の説明会がそこでありました。金のなる木への誘いが、すくなからず私たちを興奮させました。その興奮のなかで夫はじっと黙って考えごとをしている様子でしたが、人々が散ったあとでこっそり代理人に問うたのです。徴兵適齢期にある者でも募集に応じることができるだろうかと。代理人の答えはしごく簡単なものでした。移民地にいるあいだは徴兵延期を願うことができるが、成功して帰国するのにそう長くは要しないから何の心配もいらない、というのです。代理人が夫の真意に気づいていたかどうかは存じません。夫は代理人の眼の前で喜びの色をおしかくすのに苦労したと私には申しましたが、移民ができる喜びだといえばわけないものを、うしろめたい内緒の気持ちを抱いていると、そのようにもなるのでございましょう。

連絡を待つ間が落ちつかない日々でした。もし政府や会社の気が変わって、徴兵適齢期の近い者は移民を許可しないということにでもなったらどうしよう、という心配が念頭を去らないのです。そこへあの、うれしい「三月三日」にめぐりあったのです。

旧暦三月三日の節句、そう、沖縄では「浜下り」とよんでおりました。ちょうどこの季節、ブラジルでは冬へ向かおうというのに、沖縄では春、初夏——あの海風のさわやかさをいまでもよ

くおぼえております。この日、村じゅうの家々が重箱に御馳走をつめて珊瑚礁の浜におりて海の神様を拝み、潮干狩りをして遊ぶのでした。実家の母はとても料理が上手で、家事のよろずに器用でしたから、あちらこちらのお祝い事によく手伝いをたのまれたものです。そのせいか、私は嫁に行って三か月ほどになっていましたが、夫が分家をしていたので、家庭行事をとくにひとり立ちでするにも及ぶまいといわれ、母に誘われて実家の浜下りに加わったのでした。アダンの木陰で海風に吹かれながらたべた御馳走の味は忘れません。そして潮のひいた珊瑚礁の上を貝をあさって歩いたことも。珊瑚礁の深いくぼみになったところは、潮だまりといって潮がひいても深々と水を湛えていたのでした。そのなかに名はもう忘れましたが、黄色と黒のだんだら模様の魚、それからとても小さな青色の魚が群れをなして泳いでいました。ああ、あのような景色はとてもこのブラジルでは見ることはできません。ブラジルと沖縄とは何もかもが違いすぎます。ブラジルのような大平原は、もちろん沖縄では見ることができませんけれども、ブラジルへ来て暮らしや仕事で思いがけないことにぶつかるたびに、沖縄のことが思いだされたものです。そのなかでも、あの海の景色はいちばん懐かしかったものの一つです。私の幸せも不幸せも、あの海の、あの浜下りの日につながっているような気がしてなりません。

忘れることのできない光景です。浜で移民許可の電報をうけとったのです。家族みんなが浜に下りてしまっているので、郵便屋さんがわざわざ浜まで届けてくれました。夫が電報をよみくだすやいなや、つい両手をあげて万歳をするしぐさに、郵便屋さんは眼をまるくしました。四月二十四日に神戸を出航する予定だから、二十日までに神戸の収容所に集合するように、ということ

でした。夫は単純によろこびました。夫の家族と実家の母は、よろこびとさびしさとが半々であったと思います。私の気持ちは一口には言いあらわせません。なにしろ私は妻であるから夫について移民するというだけであり、行先に期待することを何ひとつ持ってはいなかったのです。もちろん、兵隊にとられなくてすむというのは嬉しいことですが、それも一年だけのことか二、三年のことになるのか。しかし、いまこのことを思うのはおそらく、その後七十年も、ついに兵隊には行かなかったけれどもそのかわりそれ以上につらい生活をしいられてきた。それよりむしろ、戦死することさえなければ、はやく日本へ帰って兵隊をつとめあげてきたほうがよかったのではないか、という思いが心の片隅にあるせいなのかも知れません。浜で私たちは、しばらくのあいだ移民への夢を語りあいながら、新暦の四月二十日といえばあと二十日もないがその支度をどうしようかなどという話しあいでつぶしました。そのとき九つになる弟が突然言いました。そんなら兄さんは兵隊には行かないのかと。これには夫も私もびっくりしてしまいまして、母があわてて弟をにらみつけたものです。そして、人差指をたてて口にあてました。夫も私も、その場をごまかして話題をそらさなければなりませんでした。

望み通りにブラジル移民に加わることができました。出発は予定よりすこしのびましたが、明治四十一年四月二十八日に神戸を出て、六月十八日にブラジルのサントス港につきました。ブラジル行の最初の移民船、笠戸丸です。船中から上陸地の移民収容所にかけては、楽でした。楽しかったといってもよいでしょう。沖縄出身の移民たちはよく三線(さんしん)をひいて踊ったりして楽しんでいました。みんな日本人ばかりで、まだ責任のある家庭生活ははじまっていなかったのです。印

象にのこっていることが一つあります。指導者のひとから教えられたのですが、ブラジルでは外人たちといろいろとつきあうので、日本人の体面を汚すような真似をしてはならん、ということでした。

移民をしなくてもよい身分だったのに、と最初に考えたのは、配耕されて一か月もたたないうちのことでした。朝はやく起きて晩おそく帰る、ということはそれほど苦になりませんでした。ただ、家ではそれを自分の考えでやっていたのに、ここでは雇用人夫としてやらされるのです。夫の家でも私の実家でも、使用人をつかって畑をさせることはあったけれども、私たち自身がよそに使われることはなかったのです。移民というものは所詮雇われにいくのだということは、かねてから承知の上であったはずなのに、現にぶつかってみて、夫も私も溜息をつくばかりでした。

住居も今日の移民には想像がつきますまい。たんに汚い、貧しい家というだけのことなら、村にもたくさんありました。草ぶきで天井がないということでは、沖縄もブラジルも同じでした。土間にアンペラを敷いたり、木づくりの寝台というのも気にはなりません。沖縄でも竹敷きの床がありましたから。食物の違いも外国に来た以上、自分で馴れるべきだと自分に言いきかせることができました。ブラジルの食事は、一つの皿に主食の豆と野菜や魚や牛肉のお菜をいっしょくたにのせるもので、まるで犬や猫の食いものと同じではないかとこぼしながら、それでも馴れていったものです。ただ、馴れないというよりも絶望に近く悲しくさえなったのは、住宅が長屋で草の壁一枚をへだてた——そう、沖縄で八月に妖怪日というのがありましたが、その日に村の若者たちが岡にのぼって夜明かしをするために薄でつくる仮小屋、あの壁に似たもので、となりの

家庭の生活もまる見えなのです。そこで寝台(カーマ)からおちてさわぐ音もはっきりと聞えて、笑いだそうとすればふと自分もふくめてのみじめな暮らしを思って泣きたくなってしまうのです。それから、朝から晩まで身体を苛(さいな)んでくる砂蚤(ビッショ)。これがいちばん情なかった。配耕されて二、三日目からは、もう爪のなかにもぐりこんで血を吸って痛いのです。これを寝る前に石油ランプの明りのなかで、針の尖でほじくりだすのが、毎晩の仕事でした。はじめはなかなかうまくとれず、そのうちに二、三日ほっておいて太らせれば、ポロリと取れやすくなる、などということを知って、そんなことに一つずつ馴れるたびに、これを幾つ重ねたら日本に帰れるものやらと思案にくれたものです。私が幼いころ私を守ってくれた親戚の姉さんが、ときどき頭に虱(しらみ)をわかすので、母がときどきそれをとってやったと、母がよく話していた、その母に今にも会ってブラジルの砂蚤(ビッショ)退治の話をしたいと思いつめたものです。しかし、もういつ会えるか分らない、しかしそのうちきっと、などと思っているうちに、私はもうその頃の母より五十歳も老いてしまいました。

それらのことよりも、さらにさらに難儀なのは、言葉でした。耕地の持ち主はブラジル人ですが、管理人もブラジル人です。そのブラジル語が私たちには全然聞きとれません。もともとポルトガル語なのだそうで、もちろん、はじめのうちは日本人の通訳が仲に立ってはくれましたけれど、言葉の通じない相手から勝手放題に使われるということがどんなに辛いものであるか、総領事館のお役人などにはお分りでしょうか。思うさまこき使われたあげく手間賃はひどいもので、かねての見込みからはずいぶんと遠いものでした。働きにはとても見合わない感じの手間賃で日々の食物をあがなうにも、言葉が通じないから値切ったりなどできません。これでは、はやく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com